

2.特別講演Ⅱ

学部横断型教育『21 世紀プログラム』と多面的評価への指針

九州大学 基幹教育院 教授 林 篤裕

林：こんにちは。九州大学の林でございます。こういうおごそかな会に呼んでいただいて私がしゃべって良いのかな、私の話で良いのかなというふうに思っております。そういう意味で、本当にこういう機会を与えていただきまして、どうもありがとうございました。

私事なのですが、実は今から 30 年以上前に大学院へ進学する際にどこに行くかと考えまして、その有力な候補が北海道大学でありまして、ただ、いろいろと事情があつて、反対側の島の方に行ってしまったようなわけなのですけれど、その後、1996 年に大学入試センターというところに就職をいたしまして、そのときの所長さんが廣重力先生とおっしゃいまして、北海道大学の第 14 代の総長の先生でありまして、あの先生はなかなか人間味が豊かなものですから、その後、いろいろと大変なことが起こったのですけれど、何とか乗り切って行かれた、かどうかは、今、何とおっしゃっておられるかは分かりませんが、その横で拝見していて非常に楽しかった覚えがあります。

その先生がたぶん今から 9 年前に叙勲を受けられまして、ここから 3 つぐらい向こうのブロックのホテルで盛大な祝賀会があつたのですけれど、廣重先生らしい会だと思つて。その会には丹保先生とか佐伯先生、どちらも総長であります、おられて、わあ、すごいと思つたことを覚えております。

その佐伯先生というのは、その後、佐々木先生と一緒に、先ほど川嶋先生のお話にもありましたけれど、高大接続テストを提唱された先生ということで、北海道と入試というのは非常につながりが深いんじゃないかというふうに思つておりました、そういうところで私がこういう話をして良いのかなという気がしておる次第であります。

もう 1 つ申し上げますと、私は実は共通第 1 次学力試験 1 期生でありまして、先ほど川嶋先生は飛ばしてしまわれましたけれど、あの頃は受験機会が 1 回しかなくて、私は非常に悔しい思いをした。何なら補償してほしいのですけれど、残念ながら補償もされずに、もう 50 歳を超えてしまつております。

先ほど、川嶋先生が、九大はちゃんともうこの 3 つの要素を測る入試をやっていますと言つて下さつて、後ろの講演に繋いでいただいたような気がしているのですけれど、どこまで皆様のご期待に応えられるかどうかは、実はあまりよく分かっていない。ただ、我々の経験を皆様にお伝えし、皆様と一緒に考えていければというふうに思いながら、講演をさせていただければと考えております。

先ほどの川嶋先生からの流れであります、知識偏重という批判に対して、どういうふ

うに我々が改革をして行けば良いのかというのが昨年12月以降の話題でありまして、高校側も戸惑っているわけですが、何より我々大学人がどういう入試が理想なのかというのを戸惑っているというのが、たぶん最近の流れなのだろうと思います。こういう話をご紹介しようと用意していたら、一昨日ですか、毎日新聞には、今度はちゃんとしないとお金の考えるよというふうなことを文科省は考えているみたいな記事まで出てきて、困ったものだなというふうに思っている次第であります。

抄録に書かせていただきましたけれど、我々は「21世紀プログラム」というものを行っております。これは何かというのは、学部横断型教育ということでタイトルの方に書かせていただきましたけれど、「21世紀プログラム」というものをまずご紹介し、その入試が何か所かで注目されましたので、その入試をご紹介しようと思っております。

入試の方法だけを紹介するのであれば高校生に対して行っている資料で良いわけですが、今回は大学人に対する講演ですから、入試の裏側で私たちが何をしているかについても、多少なりとも多面的評価の組み込みをご紹介して皆さんの参考にしていただければというふうに思いながら、この資料を作成させていただきました。

まず九州大学であります、1911年にスタートして、今年で104年目ということです。北海道大学は、うちの1つ下の弟になるわけでありまして、7歳若いわけですから、たぶん今頃100周年記念事業を計画されているのではないかと想像しておりますが、そうでもない？ まあ、何せ古い大学の一つということになっております。

学部の数が11、大学院が18、それから学生数が1万2,000人、大学院生が7,000人、我々のような教員が2,100人というふうな規模であります。これではよく解らんということがあるかもしれませんので、1学年の定員をご紹介しますと2,555名が学部定員でございます。

一番古い2つの大学、東大と京大とで比較しますと、東大の8割、京大の9割ぐらいの規模の大学となります。今日は北海道の方にお邪魔しましたので、北海道の、すみません、国立しか挙げませんでした、私立の方には申し訳ないと思っておりますが、北海道に国立大学は7つでしたよね。それと比較すると、このくらいになっているということになりまして、北大と九大というのはいろいろな意味で非常に似た性格を持っている。あと、川嶋先生に敬意を表して、一応阪大も入れてはおきましたけど、今、日本で一番大きな国立大学が阪大でございますので、阪大の7割ぐらいの規模ということになります。

これは蛇足でございますが、北海道に寄せていただくんだから、九州とどう違うんだろう。これもすみません、国立大学しか挙げておりませんが、九州には11の国立大学がございます。北海道は7つですね。定員を足すと、北海道が5,600人で、うちが1万5,000人ぐらいですから、でかいなというふうに思ったんですけど、待てよ、人口はどうなっているんだと思って調べたら、北海道は550万人で、九州は1,460万人ぐらいですから、この人口を割ると、国立大学はだいたい1,000人に1人なんですね。やはり文科省はちゃんと、こう言ったら怒られますが、やっているんだというふうに感じました。だけど、北海道は

面積が広いですから、1 人当たりの面積はどれくらいかなと出すと、やっぱり 5 倍ぐらいの面積の下宿や寮があるのかな、部屋が広くて良いなど。これは蛇足ですけど、言いたいことは、人口比からすると、そんなには違わない環境が、北海道と九州アイランドであるんだということでもあります。

さて、今日の話題の入試であります。先ほど申し上げた通り、入学定員は 2,555 名であります。一般入試と A0 入試に分けますと、一般入試で 9 割以上、7.6%を A0 入試で採っている大学でございます。A0 入試をより細かく見ていきますと、教育学部が 10 名、法学部が 10 名……農学部が 20 名で、合計 195 名、7.6%ということになっておる次第です。

それで、この今日注目の「21 世紀プログラム」が 26 名でありますので、入学定員からすると、1%強。実際に入ってくる入学者数にすると 1%弱の人数を我々は面倒を見させていただいているということになっております。

「21 世紀プログラム」の理念というのは、「専門性の高いゼネラリスト」というものがキーコンセプトになっておりまして、それを支える 3 つの柱があります。この後、何回か出てきますので、ここはさっくり行ってしまいましたが、いずれにしても専門性の高いゼネラリストということがキーワードになっている教育システムでございます。

何か少し色が悪いように思いますが、上の 4 つが文化系と言われている学部、下の 7 つが理科系と言われている学部ですけど、普通はそれぞれの学部、私は大学に入ったときは工学部でしたけれど、工学部に 4 年間所属するということになりますし、もしくは文学部に入った学生も 4 年間ここで修学するということになるわけですけども、この「21 世紀プログラム」の学生に関しては、この 11 の学部のどこで単位を取っても卒業要件にしましようということになっていることから、今日、タイトルに付けましたけれど、学部横断型というふうな教育をさせていただいている課程でございます。

言ってみれば、多くの高校生は、高校 3 年生が終わるまでの間に自分のテーマを決めて、私の場合はもともと天文学だったんですが、なぜか道を迷って機械工学に行くんですけど、いずれにしてもそうやって迷いながら専門を決めて、大学に入っていきます。「21 世紀プログラム」の学生は、自分のキーになる何らかの考えは持ってもらう必要がありますが、大学に入ってから、あのくびれているところ、糸尻のすぼまったところまでが 3 年間のつもりで描いてありますけど、3 年間は自分の興味・関心に応じてやりたいことを 11 の学部の中から選んで勉強して、最後の 1 年間は、2,100 人の教員の中から自分が一番良いと思う先生を選んで卒論の指導をしてもらいなさいというシステムを取っています。

ですから、多くの高校生に比べて、専門の決定時期が 3 年間遅くなっていますので、大学院にも進んでほしいなというふうな言っています。これまでにだいたい 4 割ぐらいの学生が進学をしているというコースになっている次第であります。これが教育の柱ですが、先ほど言ったキーコンセプトを中心にいろいろなテーマを用意し、もしくは留学に行ったりすることも多々推奨しております。

ちなみに、「トビタテ！留学 JAPAN」という政府の取り組みがありますが、今、3 期まで

終わっていますけど、ありがたいことに、各期に3人ずつ選抜されておりまして、1期生はそろそろ帰ってきて、つい先日パリから帰ってきた者もおります。そのような形で国際性ということも言っておりますし、それから、後でちょっと紹介しますけれど、自分で何を勉強するかは一人一人違いますので、カリキュラムが違う。それから、私もそうなのですが、チューターとして学生といろいろな面談をして、こんなテーマがあるんじゃないのというふうなことを助言するということになっています。先ほど申し上げた通り、最後の1年間は自分の専門を決めて、その後、社会に出るなり、大学院に行くなりしてちょうだいというふうなことを言っているものであります。

今日はあまり「21世紀プログラム」の話を長くはできませんので、ざっとしか申し上げませんが、左側が昔で言う教養系の教育でありまして、いろいろな教養系のものがある。右側が専門系であります。上の5行に関しては、「21世紀プログラム」の学生に対して専門の科目を開講しているということで、下の36単位の部分に関しては、11の学部で、もちろん36に限りませんが、取ってきていいですよということをしていて、合計で124単位の講義を受けたら卒業できますというコースになっているものであります。

これは、そちらの資料にはないのですが、今から2例を挙げますが、横軸が半期単位の進捗を示していて、1年前期、1年後期、2年前期、2年後期……、4年後期で8本立っているわけです。下の灰色部分が全学教育で、この上の白っぽいところが「21世紀プログラム」用に開講された講義で、残りの温かい系の色のところが文系の科目。この次のページに出てきますけど、寒い系の色が理系の科目になっています。この学生は、1年の前期に関してはほとんど教養の単位と「21世紀プログラム」の単位を取っているわけです。後ろに行くに従っていろいろな色が付いていて、特にここから向こう側ですね、いろいろな色が付いていて、彼の場合は赤がメインですから、経済学部ぐらいで履修をしている学生になります。

もう一人は今度、理系の学部として薬学部で卒論を書いて卒業していますけれど、彼は最初、暖色系の色が多いんですけど、だんだんブルー系の色に変わって行って、最後は薬学部で面倒を見てもらって卒業していったというふうな形です。この折れ線と棒グラフ、それに円グラフを見ると、だいたいどういうふうなところで履修をし、どういうふうに変わっていったかが見える。募集人員としては26名ですが、それぞれに異なった履修パターンを取って卒業していているという教育をさせていただいている課程ということになっております。

過去、どのくらいの数の学部を経て卒業していったのかというのは、うちは11学部ありますけど、だいたい4前後。平均すると、4学部程度で履修をして卒業していく者が多いということになっています。

これも単なる情報としてですが、約半分ぐらいの学生が、何らかの形で海外に行っています。ただ、今、約半分と言いましたけれど、これは大学の金を使って行ったのが半分でありまして、それ以外に自分の金を使って行ったり、大学の管理していないいろいろな補

助金等で海外に行く者もおりますので、最低限海外渡航届は出せと言っているんですけど、何か気が付くと海外にいる。最近、「Facebook」とかを見ていると分かるんですけど、あれあんな所に行っている、という学生がときたまいたりして、ちゃんと出そうねという話をしていますが、そういう意味では半分以上の学生が海外に何らかの形でアクセスをしています。

それから、これもちょっと色が悪いので申し訳ありませんが、言いたいことはいろいろな色があるということだけでありまして、つまり26人、滞留等もありますからもうちょっと人数が増えることもありますけれど、いろいろな学部・部局の先生方にお世話になって、最後の卒論の面倒を見てもらって出て行っているということだけを解っていただければ良いので、別に色の頻度とか長さはそれほど重要なわけではありません。つまり、学内の学部・部局の先生方にお世話をいただいて、卒業していつている学生がいるコースというふうに思っていただければと思います。

ちなみに卒業後の進路はどうなっているか、今度は温かい系の色が大学院ですが、今は4割弱、九州大学の大学院、それからこれは国内、北大はまだないので、今度言うておきますが、要するに国内の大学院、それからこの黄色い部分は地球上の大学院のどこかに行っているということになります。ブルーの寒い側の方の色は、企業に就職しているということになります。あとのまとめで申し上げますが、もうちょっと大学院進学を多くしたいなと個人的には思っていますが、最近の経済状況その他もいろいろあって、なかなか彼らの考えと一致しない部分もあるにはあるんですが、こういうふうな課程ということになっている次第です。

九州大学として、彼らにはいろいろな手当てをさせていただいているつもりです。1年生のときからいろいろな部屋が彼ら専用で、キャンパスのあちこちに用意されています。そこにはコピー機があったり、パソコンがあったり、非常にお金がかかっておりまして、私自身が学生になりたいような気もします。ですので、今は今、分散キャンパスなんですけれど、分散キャンパスのどこに行っても、自分たちの拠り所がある。そこには当然先輩もいるし後輩もいるということで、縦のつながりもできているコースになっています。これはお見せしても仕方ないかもしれませんが、ちょっと暗いですけど、廊下の向こうまでずっと「21世紀」の学生しか入っちゃいけませんよとか、それ専用のセミナー室とか、ここはパソコン室ですね。この学生は、今、阪大に。というふうなコースになっています。

ここまでが表向きに見える部分でした。裏側をご紹介しますと、実はこれを運用するには結構トリッキーなことをしています。例えば、先ほど26人だと申し上げましたが、26人をどうやって捻出しているかという、実はこういうからくりがございます。上の1行目に書いてありますけれど、入試区分の前期に実施をしている選抜単位から1人ずつをお預かりしています。つまり、文学部は1つでやっていますから1人、教育学部が1人……、6学科あれば6人分出していただくという形で、もともとこの農学部までのところが18名

でしたので、2001年と2002年、スタート当初の2年間は18名でやりました。その後、医学部に保健学科が加わりましたので、3専攻ありますので、3人足しましたので、18足す3で21人と。その後、芸術工科大学が九州大学にジョインしましたので、5学科ありますので、足して26人ということになっています。

これはうちの選抜概要なのですが、面白いことに、文学部のところを見ていただきますと、入学定員160人と書いてあるんですけど、実はアドミッションセンターオフィスの区分の「21世紀プログラム」のところに1人とありまして、前期日程と後期日程を足すと159人になるんですね。というふうな形で、前期日程で実施しているところから1人ずつ出していただいて、合計が26人になっているという次第です。

ということは、お分かりになると思うのですが、一番上の1人は、実はこれは文学部のポストをお借りしていることになります。ということで、あそこに本籍と書いてありますが、26人はそれぞれ自分のポストを持ってきた元の部局のポストが張り付いています。ですから、26人いますけれど、何とかさんは文学部で何とかちゃんは農学部で何とかちゃんは機械航空工学科だよということにはなっているんですが、合わせて26人になっています。ただ、どこの学科の定員を充てているかは学生には関係ありませんので、学生たちにそれを通知することはありませんし、お前のポストは文学部から来ているから文学部に卒論に行つてねというようなこともありません。機械的に割り振っているだけです。現住所と書いていますけど、現住所としては「21世紀プログラム」の学生として運用をしているというふうなちょっとトリッキーなことをして、運用しています。

これもちょっと見にくいのですが、学位というのは教授会マターですから、本来、文学部であれば、文学士を出すというふうになっています。うちの各学部の教授会規定には、文学士または学士（学術）が出せますよと書いてあります。ただし、後者は「21世紀プログラム」に所属の者にしか授与しないというふうに書いてあって、学部の方ではそういうふうな管理になっています。

一方、これを支援する教員団は、学内の学部・部局から50人程度にご協力いただいでいて、専任教員も2人配置しております。学部の教授会に相当するのが左側の部分でありまして、この21世紀プログラム専門委員会とそれを細かく動かす実施協議会のところが、今度こういうふうなイベントを開催するんだとか、こういうふうなことについて決定するかというふうなことを行つていまして、下の会議は月に1回、上の会議は年に4回ぐらい開かれています。

ということで、非常にややこしいというか、裏側は結構事務の方々いろいろなご苦労をかけながら運用をしていますけど、表側はさっき申し上げた通り学部横断的な教育をしているということです。そちらの資料にはありませんけど、他の学部・学科からうちに来たいという学生が若干名毎年いるものですから、たぶん皆さんの大学でも1年生の秋ぐらいに転学部、転学科というのをやっておられると思うのですが、それに相当するものが実際「21世紀プログラム」の場合にもあって、何学部からうちに来たいとかいう形で準備して

いますので、26人が定員ですけど、実際に数えてみると1人とか2人多い年が若干ある。これが実際の1期生から今いる15期生までの陣容で、今いる人数は103名。卒業していったのが300人ぐらいだったかな、261人というふうになっているようなコースです。

こういう教育をさせていただいております、結構新聞で取り上げていただいております。実はこういうニュースを取り上げられるときによく話題になるのが、この上側に書いてある思考力重視の入試ということです。そういう観点、もしくは今回の中教審答申等での観点から、紹介してほしいという依頼をたまに受けるものですから、こういう講演をさせていただいている次第であります。

ということで、ここまでが「21世紀プログラム」の概要で、ここからが入試ということになっていて、たぶんここからが皆さんのご興味の部分ではないかなというふうに思っています。

まず求める学生像ですが、学生募集要項と選抜概要をこれから回覧いたします。すみません、重かったので1部しか持って参りませんでしたけど、私も手元に置いておきたいので1部だけ、終わったらこれらもお渡ししますけど、回覧が1部しかないことをお許しいただきたいんですけど、基本的には5つの項目が書いてあります。

ちゃんと自主性を持ってくださいね。それから幅広く、つまり1つの分野ではなく幅広く勉強してくださいね。積極的に学んでくださいね。それから、当然、ある程度の勉強はして、教養を持って入って来てくださいね。それとこれはなかなか面白いのですけれど、語学力を身に付けようという意欲があれば良いと。現実に英語をちゃんとマスターしていないといけないという言い方はしていないのですけど、かといって、あまり英語が苦手だとちょっとお帰りがたがざるを得ないのですが、語学力を身に付けようという意欲があれば良いという形の、こういうことが今、回覧を始めた募集要項には書いてございます。

選抜の流れですが、あと1カ月ぐらいすると、選抜の受け付けが始まります。ですので、来月の今頃は、既に何人来たよというのが分かると思います。内容については次のシートで示しますので、全体のスケジュールを先にご紹介しますが、受け付けられた書類を元に審査をして、10月の中旬に第1次選抜を行います。そこで合格した者については11月の初旬、今年は10月に入りますけど、10月の31日と11月1日に出てきてもらって、2日間の入試をします。そして、その結果を11月の25日に発表しますということになっています。この日程は今年というか、これからやろうとしている日程です。

先ほど申し上げた第1次選抜であります、3点セットというものを出示してもらうことにしています。志望理由書、今、回覧している冊子の中に2面、罫線だけ引いてありますけど、なぜ「21世紀プログラム」に入りたいのかということを書きなさい。自分はどういうことをやりたいんだ、もしくはこういうことができるから大学に行きたいんだという思いのたけを2面で書いてもらおうということになっています。

それから調査書は高校から出てくるものですから、何も変更のしようがありません。活動歴報告書も基本的には中学校以降で、吹奏楽をしていたとか生徒会をやっていたとか何とか展で優秀賞の表彰を受けたとかというような事実を書いていただくだけです。これもあまり力を入れる必要はないと思いますが、最初の志望理由書2面については、結構考えていただく必要があろうかと思っています。

この3点セットを我々がどう審査するかというと、そのAPや学生像に合致する者を通させることになっています。「21世紀プログラム」は、実は資格が取れません。例えば医学部で勉強したから医者になれるとか教育学部に行ったから教員の免許が取れるということにはなっていません。ですから、例えば薬剤師になりたいんですと書かれたら、じゃあ、それはうちじゃないねということでお帰りいただくしかないですし、F1のエンジンが造りたいと言われたら、それは機械航空かどこかに行きなさいということになるのでお帰りいただくしかないということで、そういうふうな形のAPと合致しているかどうかということを含めて、合否を決めております。

昨年は99名が志願されて、この後の試験のキャパシティが80名ですから80名まで入れるんですが、いろいろと議論した結果、7名を欠いて、73名を1次選抜で通しました。80名採りたかったのですが、採ったとしてもたぶん2次選抜でいろいろな議論が起こるだろうということで、7名を欠いて昨年は合格させました。

2次選抜、ここはゆっくりしゃべった方が良いと思うのですが、今日の要点の部分です。土曜日、まず九大の教員が50分間講義をします。それに続いて、先生が作成した問題を70分間、レポートという形で課します。それを人文、社会、自然という昔の教養の3本柱に相当する、なるべく重ならない話題で3つ提供します。これで1日目が終わります。

2日目は、講義を3つ前日に聞いているわけですから、3つ聞いたうちの2つを受験生それぞれに選んでもらって、昨日聞いたあの先生の話だけど、私はこういう方法があるんじゃないかとか、こういうふうな情報があればこういう展開があるんじゃないかというようなことを受験生同士で議論してもらいます。テーマ1, 2, 3の順番に議論してもらいます。

先生の意見を聞いた、友達のことを聞いたということで、午後は、今度は3つから1つを選んで小論文を書いてもらう。これはA4で3面に書いてもらいます。その小論文と平行して個人面接を行う。あらかじめ指定した、例えばあなたは15時から15時15分ですよという形で指定した15分間に別室に来てもらって個人面接も行うと、こういうふうな入試をさせていただいています。

このような説明をしたら、記事を書いた記者さんが丁寧なことに、タイトルを付けてくださいました。「13時間かけ選抜」。私たちは、13時間という認識は全くありませんでした。私があの記事を取り上げて最初にやったことは、電卓を取り出して、これを全部足して60で割ると、本当に13になっていました。僕たちは13時間もやっていたのかと新聞記者に教えられた次第でありました。

この入試の面白いところは、講義の1つ目と2つ目の間で、机の周りが友達になります。

自分は何で大学に行こうとしているのか、私はこのテーマをやりたいから2プロ、「21世紀プログラム」のことを2プロと言いますが、2プロを志願したんだというようなことを机の周りでだいたい友達になって、いろいろワイワイ騒いでいます。講義の2つ目と3つ目の間で、だいたい教室中、80人が上限ですけど、教室中が友達になります。あなたがやりたいということを、何か後ろの方で同じようなことを言っていた人がいたよということで、休み時間がやたらうるさい。うるさいと言っても騒いでいるのではなくて、大学に何を求めているのか、何がやりたくて大学に来ようとしているのかということワイワイ意見交換している。それで、さようならと言って帰って行って、おはようとしてくる入試です。

ここは大学の方がほとんどでしょうから、言ってみればセミナーのような風景が入試会場で展開されています。だから、本当は私もこれに加わりたいたのですが、変に一部の受験生とだけ議論をしたりすると、またいろいろ後々言われるものですから、泣く泣く彼らとはしらじらしくあいさつぐらいしかせずに控え室に帰るようにしています。彼らはいろいろな話をしていて、本当は私も一緒に輪に加わりたいたというふうに思っている次第です。

次のシートにここ5年間の話題が書いてありますが、去年、一番直近であれば、「身の回りの確率論」とか「里地・里山の保全」とか「古語は辺境に残る?」、古い言葉は京都を中心に同心円状に広がっていきますから、そういうふうなことをネタに、彼らの思考力とか表現力を見ようという講義をしています。すでに15年間やっていますから、3×15で45番組を私たちは持っているということになります。

彼らに無記名のアンケートを書いてもらっているんですが、楽しかったという感想が非常に多い。繰り返しますけど、入試なので、特に3倍以上の倍率ですから、2人ぐらい蹴落とせば入れる可能性はあります。しかしそうではなくて、楽しかったとか、いろいろな人と議論できることが面白いんだということを彼らは書いています。受験会場で採ったアンケートですから、多少の粉飾はあるとしても。中には受験生のために会場を設営してくれてありがとうと書いてあることもあります。本当にこれを見ると感動と言うとあれなんですけど、不思議な雰囲気ですし、終わった後、わざわざ教卓の前まで来て、ありがとうと言って頭を下げて帰っていく受験生までいてくださって、本当に不思議な入試です。

ここまでが表から判る入試です。今日は入試に関するセミナーですから、裏側についてもご紹介しようというのが今日のメインです。

2次選抜に当たって、先ほど80名と言いましたが、1つの部屋には16名しか入れませんので、80名を5群に分けないといけません。どう分けても良いのですが、今は1次の成績で、1, 2, 3, 4, 5, 6という形で、なるべく特定の部屋に優秀者ばかり集まるといったことがないような形で分けています。ただ、これは後で言いますが、それほど意味のあることではありません。むしろ意味があるのは、それ以外の左側でありまして、男女比を一定にするとか現浪比を一定にするとか、九州とそれ以外の比率を一定にするとか。あと、

同一高校の出身者がいるといろいろとやりにくいでしょう。5人以内であればこういうことができます。かつて8人出願してきた高校がありまして、どうなるかなと思ったんですけど、1次選抜で5人以下になりましたので、何とかあったというふうなこともございました。だから、そういう形で均質化を図っています。実際にやるのは大変なんですけど、これはそんなに理論的には難しいことではありません。

それで、裏側で何をしているかという、これは丸一つが1人ですが、1次選抜はさっき言った3点セットについて、4名の教員が独立に採点をします。採点の方法は次のシートで言いますが、4名の教員が独立に、去年であれば99名を審査する。それから2次選抜については、先ほど講義をすと言いましたけど、この赤のマークが付いているのが講義で登壇をしている先生ですが、実はそれ以外に補助の先生が2人付いています。このテーマについてちゃんと審査ができる先生ということで、1つの講義について3名の教員が付いています。それが講義1, 2, 3という形でありますので、それぞれの先生方が出てくるレポート、これは全受験生からレポートが出てきますので、73名分です。それから、小論文は先ほど3つから1つ選ぶと言いましたので、選択したものの小論文について審査をしていただきます。

それから、討論と面接について。今度は部屋が5つありますので、それぞれに3人の先生を配置しています。話題が人文、社会、自然という形で多岐にわたりますので、文系の先生1人、理系の先生1人という形にしています。この表にはカウンセラーと書いてありますけれど、学内のカウンセラーの先生方を毎年お願いするのがちょっともう耐えられなくなってきました。今年度からはカウンセラーの先生以外も入ることにはなっています。いずれにしても3名の教員で彼らの議論を聞いていて、ちゃんと議論をしているのか、それとも単に自説だけを述べているだけなのか等々を3人ずつの先生で見させていただく。1人は必ず女性の先生を入れるようにしていますが、そういうふうな審査をしています。

それぞれについて4段階評価をしています。九州大学にぜひ入ってほしいなと思えばA、入学後の修学に耐えないんじゃないかなと思う者にはDという形で、AからDに評価をしていただきます。活動歴報告書、中学校以降の活動歴については3段階ですが、それ以外については4段階で評価をしていただいています。

かつては4段階を自由に先生方に判断をいただいていたのですが、ややDを多めに付ける先生が一部にいらっしやいまして、後々の流れが非常にやりにくくなったことがありますので、現在は、1次選抜は別ですが2次選抜に関しては、A, B, C, Dをある程度の頻度、ある程度でそんなにイグザクトなものじゃないんですけど、ある程度の頻度でお願いをして、採点をしていただいています。ただ、どうしてもその先生が私はDを3人付けたいんだと言われたら、もうそれは仕方がないと思っていますけど、ある程度の緩やかな頻度を付けて、先生方に採点をお願いしています。

それで、今、申し上げたように、AからDが出て参ります。これをどういうふうにも評価するのか。ここがたぶん今日の一番のメインになろうかと思えます。このシートは後で出

しますので、ちょっと次のシートを見てください。例えば、この第1次選抜に関しては、調査書、志望理由書、活動歴報告書と3つあるわけですけど、これをルービックキューブの形に配置するわけです。そうすると、AAA、つまりトリプルAの受験生がそれは1位だろうと分かるでしょうし、DDCの受験生は48位になるのは、それはたぶん多くの方がお解りいただけると思います。48個のセルがあるわけですけど、それをある一定のルールに基づいて順位を付けていくわけです。つまり、AAAの次にAABが良いのかABAが、BAAが良いのか、3方向にベクトルがあるわけですけど、それをどのような順位にするのか。ここの1位は決まっているんですが、2位がこっちに行くのか、こっちに行くのかは内部で決めています。別に隠すつもりはないのですが、私が覚えていないから、どっちは分かっていないんです。いずれにしても、このルービックキューブの中をうねうねとオーダーを付けていく。

また、この1つのセルには複数の受験生が配置されますけど、例えばAAAに3人配置されるということになると、それは代表値として、2位だと。いろいろなランキングで同率になると同じ値を取るような形です。3人いると、それについては全員2位だねという形で、同順位を考慮した上での順位をこの48個のセルの中に付けていきます。例えば去年であれば99人に対して列をずっと作って行って、どこまで採るかというふうなことをやっています。ここが1つ、大きなノウハウだろうというふうに思っています。

先ほど申しあげましたけれど、順位ですから、小さい方が前に座っているということですから、数値の小さい受験生がより上位にいるということを考えて、順位の合計点が小さい方から合否を決める。1次の場合は80名前後、2次の場合は26名前後のところが一番議論になるわけです。選抜に関係した先生方全員が一堂に会して、私はこの受験生についてはBだと思うとか、Cマイナスだと思うとか、私はこの受験生はやっぱりDしかないとかいうことを議論します。たぶん3時間ぐらいかかるんですが、延々とやって、結局、じゃあ、今年は何人にしましょうとなる。

ちなみに、昨年は残念ながら25人しか採っていません。26番目は空席という形になっているわけです。35人ぐらいの教員以外にも、評価には関わりませんが支援してくれている事務方が10名ぐらいいますので、45人前後がこの入試を運営しているということになっています。

この赤い線が倍率です。一時期7倍ぐらいまで行ったこともありますが、最近は4倍ぐらいである程度落ち着いています。4倍ぐらいいてほしいなと思っていますけど、今年がどうなるかはまだふたを開けてみないと分かりません。

それから、皆さんのお手元の方が読みやすいと思いますが、赤い色が女の子、青い色が男の子ですが、志願者の段階ではイーブンですね。男性と女性がほとんど同数なのですが、合格者になると、女の子がやたら増える。18歳というポイントでは、女性の方がやや言語運用能力が高いのかなというふうな自己納得というか、そういうふうな解釈をしています。この中に別の観点をお持ちの方がいらっしゃいましたら是非教えていただければと思って

います。

高校の成績も A, B, 若干 C も一部入っています。入学者の地域プロフィールは、九州大学は残念なことに、北大みたいにいろいろなところから学生が来てくれませんで、九州エリアが非常に多ございます。ぜひ広げたいというふうに思っている次第です。高校が多いせいなのか、いろいろな高校があるのか、東京がぼつんと出ていまして、東北はあまりおりません。北海道からは 5 人来ていただいて、北海道に帰った学生もおります。他には海外からも来ている。こういうふうな出身エリアになっています。ここまでが「21 世紀プログラム」の話です。

あと、2 枚ほどスライドがあります。今日、川嶋先生も多面的評価ということでご紹介いただきましたけれど、九州大学は A0 入試を国立大学で初めて導入した 3 大学の一つです。他は東北と筑波が 1 期生ですが、A0 入試を既に 16 年間やっています。この図は過去からどういうふうに変遷していったかが描いてあります。九州大学の場合は、基本的には推薦入試を A0 入試に変えただけで、A0 のために新しく立ち上げたというものではありません。唯一、星マークを付けた 3 つだけが前の歴史を持たずに A0 入試から始めたわけですけど、それ以前は推薦という形で行っていたところがほとんどです。

皆さんの中に注目される方がいらっしゃるかもしれませんが、法学部は最初やっていたのですが、いったん終了して、今年からまた A0 入試をスタートさせました。最初にやったときはセンター試験を使わずにでしたけど、今回からはセンター試験を使うという形で、A0 入試を再登場させました。復活とはちょっと違って、毛色が違うので、私は新しく立ち上げ直したというイメージの方がよろしいかと思っています。

どういうふうな手法で選抜をしていたかというのが次のシートになります。いろいろな選抜がありまして、いちいち読み上げませんけれども、いろいろな方法で選抜をしてきました。たぶんこれから先生方がお考えになる手法も、これの中からチョイスしながら進んでいくことになるのではないかなというふうに思って、このリストを挙げた次第です。

さて、もう時間がなくなって参りましたので、まとめに入りたいと思います。「21 世紀プログラム」は、要するに学部を横断した教育をしていることになります。キーワードは専門性の高いゼネラリストで、海外にも行く学生が多いということになっています。11 の全部の学部で履修ができる。

これは私の個人的な感想ですけど、総合大学ならこういう課程を置くべきではないかなと思っていますが、残念ながらこれを導入している大学はほとんどありません。私も関わっているわけですが、結構学内は大変ですので、なかなかこれに乗ってみようかという大学が多くないのは分からないでもありません。いろいろな学生がいることが総合大学の魅力の一つだと思って下さるのであれば手を出していただければなということ、北海道大学とか如何でしょうか。ご協力はさせていただきたいと思っています。

いろいろな学生がいるという意味で、多様な学生を育てる方法の 1 つとして「21 世紀プログラム」があります。ここには運営には工夫と書いてありますが、先ほどから何回か申

上げていますが、運用は結構大変です。学内のいろいろな風にさらされながら、だからここにあります。学内外の理解を得ることに腐心しながら運用しています。彼らは1%の学生なのですが、いろいろなイベントを覗いてみても必ずそこに1人以上いたりします。そういう意味で、私は彼らは分身の術を持っているんじゃないかと思うんです。要するに他の学生に対しても、こんな活動ができるんだということをアピールしてくれているという意味で、カナリア効果と書かせていただきました。他の学部生に対してもいろいろと影響がありますし、彼らにとってもやっぱり2プロには負けたくないという気持ちも湧いて相乗効果があります。うちは1%ですけど、うまく回っているように私は感じています。

大学院にもうちょっと行ってねというのは先ほど申し上げました。なかなかこの「21世紀プログラム」をまだ知っていただけていない部分があるので、私の努力の足りない部分があるように思っています。

この入試に関しては、基本的には大学教育の一端を彼らに経験してもらって、彼らがどういうふうに反応するかを見ているということになります。ですから、書くとか読むとか考えるとか議論するとかまとめるとかいうふうなことを通して、思考力、表現力、協働性等を見ているのかなと思っています。今回の中教審答申で測ってほしいと言っている事項の中に主体性というものもあります。主体性はうちではまだ十分に測れていないのかなと個人的には思っていますが、何か良い方法があれば、また川嶋先生等に聞いてみようかなと思っています。

私は高校生や高校関係者に言うのですけれど、高校でどういうことをやっているんですか。日頃、どういう議論を高校生同士、親御さん、先生方とやっているんですか。それを2日間我々に見せていただいて、なるほど、これであれば大学でも生きていけるねという生徒を採れば良いんじゃないかな、ちょっと理想論も入っていますが、そういうふうに考えて実施しています。

これは皆さんもお感じになっておられると思いますが、非常に手間がかかります。我々のような運営側にも10名ぐらいいますから、合計で35名程度の教員が関わっています。先ほどご紹介したA委員、B委員と言った委員、A委員が9名、B委員が15名いますが、これは全学から毎年集め直していますが、24名を集めるのもやたら大変です。

入試としてこういうふうなことをやっています。先生、協力してもらえませんかと言診するわけですが、それぞれ「21世紀プログラム」に対してお気持ちがございますので、協力していただけない先生がいてもそれは仕方がないと思っています。このような打診作業をやるというのは非常に大変ですし、何よりも提供する話題がきちんと高校生にフィットするかということも重要なことですし、いろいろな難題を改善させながら実施していると言うのが良いのかもしれませんが、これまで15回やってきたということです。

じゃあ、やめるのかというと、私はそうはならないというふうに思っています。やはりいろいろな意味で、“良い”学生が確保できていますし、彼らはそれぞれ学内、学外、国外で活躍をしてくれています。九大全体に対しても影響を及ぼしてくれていますので、私は

続けていくべきだろうというふうに思っています。

そういう意味で、入試の実施には学内の人的ネットワークが非常に重要になってくるというふうに思っています。先々週、川嶋先生がうちに来られて、いろいろ相談をしたのですが、その評価方法に関して何かルーブリックを作っているのかと質問されたのですが、細かなルーブリックは存在しません。だから、つまり例えば表現力を3ポイントにしてくださいとか思考力を2にしてくださいとか、何かそういうふうな評価基準を我々が持っているわけではありません。24名の先生方、1次も入れるとプラス4ですから28名ですか、28名の先生方にそれぞれ九大生としてこいつは面白い、こいつと一緒に話がしてみたいと思えばAだし、いや、これはいかんといったらDという形で評価するようにお願いをしています。

A委員、B委員を頼むときに、このことはよく聞かれます。評価方法について委員同士で相談する必要があるんでしょうかということをおっしゃりますが、この実施を運営している部隊の中で議論をした結果として、評価は個々の先生方独自に考えてもらう。同じようなベクトルになるのであれば敢えて3人は要らないんだから、先生の観点でA、この先生の観点ではCということがあっても良いということで、細かなルーブリックは存在していません。

と、ここまで紹介させていただきましたが、今日、皆さんにお届けする情報としてはここまでです。え？ その先を聞くためにこのセミナーに参加したのに、とか、40分も我慢したのにと言われるかもしれませんが、すみません、肩透かしになっているかもしれません。ただ、1つ言えることは、先ほども申し上げましたが、Aについては例えば1割ですよとかCについては4割ですよという形のある程度の緩やかな頻度は出してはいますが、それも決定的なものではないということになっています。そういう意味で、皆さんのご期待には応えられていない講演になってしまっているとすると、僕たちもこのくらいで苦勞しているんですというふうに同情いただければありがたいかなと思っています。

それで、先ほどちょっと2次のときの配置のところでは言ったんですが、実は1次と2次にはあまり関係がございません。つまり、1次で選抜している内容と2次で選抜している内容のベクトルがどうも直行しているようでありまして、関係はほとんどありません。

中には2回測定しているのに、全然別なことを測っていて良いのかということをおっしゃる方がありますが、私は良いと思っています。2回受験生たちを評価するわけですから、同じ軸があるのであれば1回にしてしまって、別のベクトルで測るのは、私、統計を専門にしている者としては、良いと思っています。

ただ、実施者として注意をしないとイケないのは、1次で優秀な学生を取りこぼすと取り返しが付かないということです。1次で下の方に沈んでいて、もしくはこれはボーダーぎりぎりだからもう帰っていただくというふうになっても、2次を受けさせるとずっと上がってくる受験生がいます。逆もあります。

そういう意味で、優秀な受験生に1次でお帰りいただいてしまいますと、我々は非常に

まずいことになるので、1次で落とす受験生に関しても相当な議論をしています。それと、今、4倍ぐらいの倍率ですけど、もうちょっと増えとうれしい。そういう意味で、広報がいるでしょうし、先ほど川嶋先生がちょっとおっしゃっていましたが、A0入試というのは、随分と大学によって特性が違うように思っていますので、こういうふうなやたら時間のかかっているA0入試もあるんだということをぜひ理解していただければと思っています。

今日のメインテーマである「多面的評価に向けて」であります。ここも先ほどと同じように、あまり皆さんに示唆的なことは言えませんが、今までやってきたものの組み合わせでやる、もしくは重み付けでやるしかないのかなと思っています。我々も新規開発できればやりたいのですが、なかなか過去の先輩方がきちんとした入試をされてきていましたので、新しい何かができるというふうには、別に最初からさじを投げていないわけじゃないのですが、私はあまりなさそうな気がしています。

先ほど、川嶋先生のまとめにもありましたけれど、これを3,000名に対してやれるかと言われると、それは無理ですとしか言いようがないので、この講演を聴いて結局そういう結論なのと言われるかもしれません。やはり26人を採るために35人ぐらいの教員を使って、事務職員を入れると50人近くを使って、2日間やっているわけですね。実施の時間だけで13時間ですから、あまり具体的なことを言っちゃいけないのですが、春ぐらいからいろいろと準備をしていますので、やたら手間がかかるわけです。これを3,000名、うちは2,555名で受験者数が8,000名ですけど、それに対してできるとはなかなか言えないのが非常に辛いところでありまして、困ったなというふうに思っている次第です。

もう既に時間が過ぎましたけれども、この話は実は中教審の高大接続特別部会などでさせていただきました。この文字列で検索していただければ、このURLが出てきます。「高大特別接続部会 第7回 議事録」と指定していただくと、私が当時、5月24日にしゃべったものがそのまま標準語で出て参ります。私は関西弁でしゃべったんですが、なぜか標準語で議事録が出ております。もし必要であれば、資料も含めて出ておりますので、ご参考にしていただければと思います。

それから『中等教育資料』というところにも書いてと言われたので、「21世紀プログラム」および選抜について書かせていただきました。こういうふうな表紙ですが、高校の先生方が主にご覧になる雑誌なんだそうですが出ておりますので、もし、ご興味があればこちらでもご覧いただければというふうに思っています。

表紙のところにURLを書きました。これは単に先生方のお手元にある資料がここに掲載されているだけでありますが、この資料の字が小さくて見にくいという場合はPDFで提供しておりますので、拡大していただければその数字が読めるかなと思っています。もしお知り合いの方にこの資料をわざわざコピーして渡すと汚くなりますので、このURLを送っていただければ、そこに全く同じものが置いてありますのでご参考までということ、表紙の一番下のところに書かせていただきました。

ということで、最後の方はだいぶ駆け足にはなりましたが、「21 世紀プログラム」というもの、および、その中でどういうふうな評価をさせていただいて、実際裏側ではどういうふうに我々が動いているかということを紹介させていただきました。どこまで皆様方の参考になったかは、多々不安がありますし、申し訳ない気持ちもたくさんあるんですが、多少なりとも何か示唆になれば幸いです。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)